

現 地 通 信

マラヤ大学

「日本研究講座」の発足

森 口 兼 二

は じ め に

マラヤ大学の「日本研究講座」は、昭和41年度からの日本外務省による東南アジア5カ国への寄贈講座のひとつである。外務省は、これにさきだち、昭和40年11月からタイ国タマサート大学に対する講座の寄贈を試みており、このタイ国への派遣講師団のひとりに、「東南アジア研究」誌上でも「アカ語の研究」を発表された桂満希郎さんが、日本語講師として参加された。今回、同種の外務省寄贈講座がマレーシア・ホンコン・インドネシア・フィリピンを加えた5カ国に拡張されることになったのは、タイ国タマサート大学での成功経験に基づいているものと考えてよいであろう。

ところで、しばしば「東南アジア」とひとからげに取扱われる習慣の一般化にもかかわらず、東南アジア諸国の国情にはそれぞれ著しい相違があることは周知の事実であり、寄贈講座の受入れ方にも大きなちがいが見られるようである。この相違は、文部省から5カ国の寄贈講座の模様を視察に来られ、5月20

日マラヤ大学を訪問された柴沼事務官が、帰日後さっそく寄せられた筆者への手紙にも強調されていた。だが、現に確認されつつある受入れ国側の受容態度の相違は、その実施にさきだち、外務省から寄贈予定国に向けて出された意向打診の照会文書に対して、各国からよせられた回答にも、すでに明らかにうかがえた。そうして、卒直に言って、マラヤ大学からの回答には、同国唯一の総合大学としての誇り高い態度がにじみ出ており、「マラヤ大学全体の教育組織や行政を乱したり、その水準を下げるような安易な寄贈では困る」と要約してよい意志表示が、はっきりとうかがえた。その一端は、「派遣講師団は、新学期開始の数カ月前に大学に到着し、同大学行政の組織に精通した上で授業に参加してもらいたい」という希望に象徴されている。実に堂々とした、爽快な受容態度である。結局、栗本一男・前田成文両講師とわたくしが現地に赴くのは、新学期開始の3カ月前ということで了解を得たが、先方の態度が毅然としたものであっただけに、出発前の雑務整理に追われながら、第一陣として派遣されることになったわたくしどもの気持は、正直いって並ならぬ心理的負担であった。

出発前後の事情

いよいよ2月10日出発ということで、外務省に連絡に赴いた2月9日になって、それも出発のあいさつの最中に、「出発1週間見合わせよ」というマレーシア日本大使館からの電報が届いた。電文ではよく分からないが、理由のひとつは、まだマラヤ大学の理事会がこの案件を最終的に通していないことをにおわせていたので、中心いささか大げさな心配をしながら待機していた。1週間して到着し

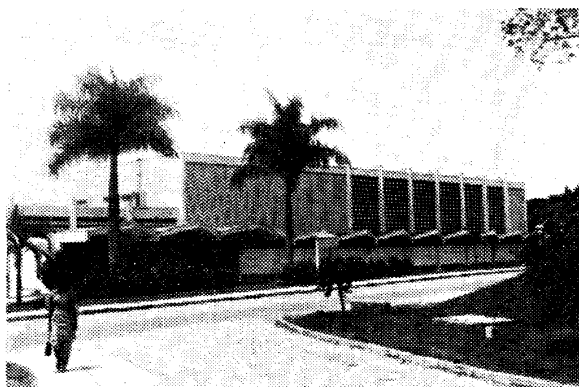


写真1 マラヤ大学図書館

てよいという連絡を受け、出発のおくれる前田君をのこして、栗本君とわたくしども家族が現地に到着したのは2月19日である。

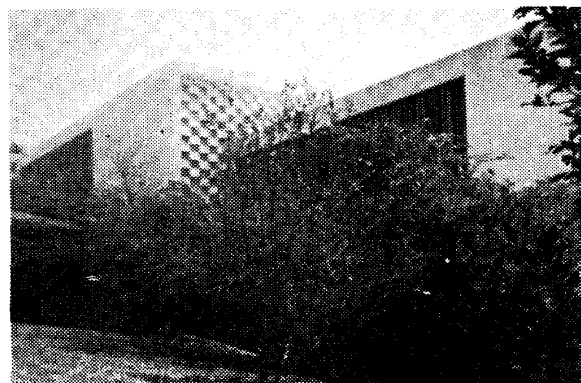
クアラルンプール空港に着いてみると、この講座の件で日本に連絡に来られた経済学部長のウング・アジズ教授、当時の文学部長のタニ・ナヤガン教授、中国研究科主任のホー・ペン・ヨク現文学部長、歴史学科主任のワン・ガン・ウー教授らのにこやかなお出迎えを受けた。そして、この寄贈講座に対する大学側での慎重な審議経過と、いま空港で見る晴れやかな、マラヤ・中国・印度系の代表学者の一致した心からの歓迎的態度を心中で結び合わせ、1週間足どめの不安もようやくけしとんだ。

到着してからの1週間はホテル住まいで、マラヤ大学関係部局や大使館へのあいさつ、大学側との基本的な打合せ、家さがしなどで目のまわるような思いをしたが、2月25日に住居も安定した。2月の最終日に前田成文君も1週間おくれで無事到着、マラヤ派遣部隊がめでたく勢ぞろいし、3月1日には大学内に日本研究講座用のオフィス（研究室）を2部屋もらって本番5分前の準備を始めることになった。

マラヤ大学における日本研究 講座受入れ方

マラヤ大学は1957年に初講義を行なってい

るが、独立の国立大学として発足したのは1962年であり、マレーシアのラーマン首相自身を総長とするきわめて新しい、しかもこの国で唯一の総合大学である。現在、文・理・農・工・医・教育・経済の7学部であり、日本研究講座は文学部に所属している。わたくしのはうは文学部歴史学科の visiting professor として、「日本の近代化」を、栗本・前田両君は文学部中国研究学科の visiting lecturer として「日本語初級」の授業を担当することになった。この大学で独立の「日本研究学科」をつくるには、第1、第2、第3学年の各学生を対象とする系統的な授業計画をもち、専攻学生には、おおよそ12単位程度のものを取得させ得るものでなければならない。ところが、この1単位というのがたいへんで、通常、1単位を出す授業に1人（他にチューター若干名）がかかりきらねばならない。1時間の本講義に、平均1時間の個人指導(Tutorial)をせねばならず、個人指導のクラスは10人前後が上限とされるから、50人の通常クラスならチュートリアルクラスのクラスが、講義授業のほかに1週間5クラス加わる。現に、われわれは、ふうふういいながら、3人で2単位出しているのが現状であり、わたくし自身は、12のチュートリアル・クラスをもっている。これでは、マラヤ大学が期待する正規のデグリー・コース(独立の学科ということ)の水準に

写真2 日本研究講座の行なわれている
文学部レクチャー・シアター

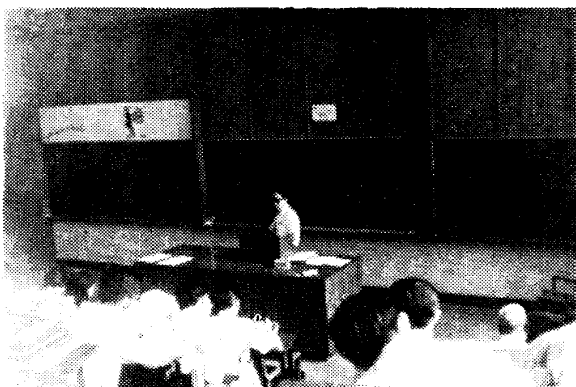


写真3 栗本一男君奮闘の図 白髪の熱心な聴講生の姿も見える

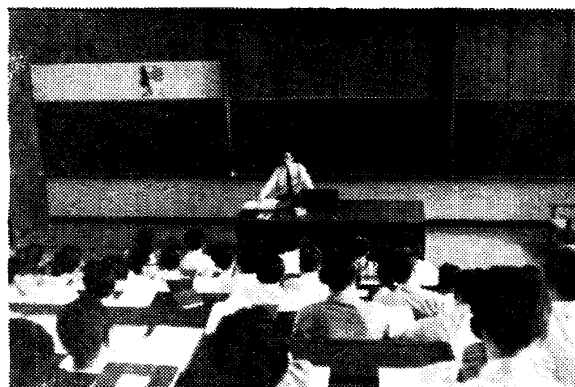


写真4 前田成文君日本語授業

くらべ、外務省の3人というデラックス版寄贈講座も期待の半分にも満たない感じである。

われわれは今のところ、中国研究学科と歴史学科に分かれて所属しているが、とうぶんこのような措置はいたしかたないであろう。マラヤ大学側は文字どおりの最高学府として大威張りで寄贈を受けとり、寄贈した日本側は、筋の通ったその受容態度や期待水準の高さの手前、多少ちこまりたくなるような気分であった。これは誠によい反省材料となった。低開発国向けの協力援助額の目標である国民所得の1%実現というのも悪くはないが、問題は量や額だけではなく、より以上に質と先方の要求への合致度であるといいたい。1%実現のあかつきにも、質の吟味を忘れ、先方の要求を無視した援助なら、場合によってはないよりも悪いという結果を招くであろう。「のどから手が出るほどのニーズ」に焦点をしばって、十分すぎるほどの援助を考えねば、それは日本側の自己満足に終わるだけである。この日本研究講座にしても、おくられた講師団がいい加減な人選なら、すぐにも「もらわないほうがまし」なものになってしまう。「いま、このわたくしが、日本国外務省の意図とマラヤ大学の期待をうらぎって、ないほうがましのものにしているのではないか」という反省は、正直いって、重苦しいものである。

ろくに準備をするひまもなく当地にやってきた3人のマラヤ・チームは、連日の暑さの中で、重苦しい反省と寄贈教材類についての整理やら授業準備に追われながら、あっと気がつくと、もはや授業開始は目の前に迫っていた。この間、栗本・前田両君は2人の日本留学希望者に対し、自主トレーニングを兼ねて、毎日、課外日本語のインテンシブ・コースを実施した。当時まだクーラーもなかったオフィスで、ほんとうに立派だったと思う。今では、オフィスも3部屋にふえ、各人、クーラー付きの個室を占領するに至った。大学側も創立後、急速な発展を期して、連日多忙な中で、こちらが要求したことには、進んで耳をかたむけ、ほとんど通してくれている。オフィスの増加、クーラーのとりつけ、電話、タイプ・デスク購入などと考えてゆくと、大学側から示されている好意も十分に感じとれる。

授 業 開 始

5月の18日から新学期の学生受講受付やらガイダンスが始まる。希望者いかと待っていると、あっという間に、用意しておいた教科書がほとんどなくなっている。受付け前に、関係教授などから、だいたいの見積りをきき、「近代化」は40～50名、「日本語」は30名までと考え、若干の余裕を見込んで準備してき

たのだが、いよいよ幕をあけると、希望者ははるかに多い。困りながらも、教材不足は何とか追加注文でのり切れると考え、希望者全員受講を認めた。「日本語初級」が60名、「近代化」が157名で、それぞれ倍を越す受講者があり、日本への関心が並々でないことを知らされたのである。授業を始めてみて痛切に感じたのは、わたくしの英語による表現能力の不十分さである。これは、割合に簡単な算数の問題として考えられることだと思うが、表現能力が日本語の「3分の1」なら、実力も3分の1しか出せないということである。若い世代には新しい国際派がどんどん育っているのだから心強いが、戦中派以上の年輩層を考えると、英語で実力が3分の1出せる人というのは、指おり数えられる程度ではないかと思う。わたくしなどももちろん論外で「10分の1」すらあやしい。いまの日本に、この寄贈講座を思いついてよいだけの人材面での裏付けがあるかと問われれば、わたくしは、正直いって首をかしげる。それすら引受けた時には、まだ分かっていなかった。日本の学界に、国際的な表現能力がない多数者が既得権を守ろうとする結果、それをもつ者の「語才」を利用しつつ黙殺する傾向があるのは感心しない。わたくしも、その感心しない人間のひとりであった。だが、今後の日本を考えるなら、語才を黙殺するのではなく、それをどうしてでも、これからの「学者育成計画」にもりこむようにせねばならない。島国の中でしか発言できない学者というのでは、あまりに淋しすぎる。

「日本研究講座」の「日本語初級」は、最初マラヤ大学からの希望もあって、英語メディアのほか、マラヤ語メディアによるものを1本つくろうという計画であった。いままでも、ピース・コーによるお嬢さん2人が大学の日本語を受持ってきているが、それが、中国研究科の中国系学生によってだけ利用され

ているからである。けれども、予定どおり、かりに今年から前田君によってマラヤ・メディアのものを始めても、今後、マラヤ語で日本語の教えられるような人材の補給難は目に見えているので、やめることになった。そのかわり、中国研究科の学生に限らず、ひろく文学部、経済学部の一学年に開放する仕組とられ、現在、大学院をのぞくと56名の出席者があり、39名の中国系学生につき、15名のマレー系学生が聴講している。だが、漢字がよめるかよめないかが、日本語修得に著しく影響するとすれば、メディアは英語としても、将来、ストリームを分けて、2本立ての初級を用意せねばならないであろう。

同じ観点から、「日本近代化」の方の聴講学生人種別構成を見てみると、調査票にかきこんでもらった155名のうち、100名が中国系、35名が印度系、20名がマレー系となっている。だが、大学に来るまでの学校で使用されていたメディアは全員英語であり、英語系学校以外のものは、ほとんど大学には入って来ないという事実を物語っている。

マレーシアの二重課題性

マレーシアは複合人種国家である。マレーシア全体の構成では、マレー系・中国系・タミール系の構成比が、だいたい5:4:1となるが、首府クアラルンプールでは約3分の2が中国系である。大学の学生に関する人種別構成比もクアラルンプールのそれに近く、2:6:2と中国系が多い。この国は、何よりも複合人種国家としての統一発展という必須課題をもっているが、第2にマレー人中心の統一という課題意識も強く底在しており、第2の課題をめぐるっては人種によって利害感情も異なってくるだけに容易な問題ではない。映画館に入って、マレーシア国歌の演奏が行なわれている時、タイ国のような整然とした全員起立が見られず、マレー人の多い劇場と、

中国系の人が多い劇場では反応がまるで違うといった実情は、こちらの生活体験者のすべてが語ることである。1967年度よりマラヤ語を唯一の官庁語にするということで、「国語に勝利を」の呼びかけが、あちこちに見られる。にもかかわらず、大学の講義の大多数は英語を媒体としており、学生間のコミュニケーションも英語である。小学校から、英・マレイ・中国・タミールの四つのメディアによることが認められてきたが、マレー系・中国系志願者は減少し、英語系をえらぶ希望者が激増しているということは、まぎれもない事実である。



写真5 マラヤ大学構内にあるモスク
金曜日には学生達が集まる

マラヤ語普及運動は着実に義務教育に根を下ろしているが、いまの段階では、複合民族間の大衆媒体として成功しつつあるのであり、エリートのための媒体はやはり英語ということになる。この問題に関連して、われわれはマレーシア文部省から現地協力者としてひとつの依頼を受けたことに簡単にふれておきたい。

いま、マレーシアには中学校の課程（小学校から数えて第7学年からの学年）に第2外

国語を入れる計画がある。その対象として考えられているのが、独・仏とタイ・日の4カ国語であり、「日本語の中学3年間への導入をどのようにすべきか」という準備的打診が、われわれに対して行なわれたのである。日本を重要視していることがこれでも分かるし、それは、日本がマレーシア商品の輸出先（買手）として、米・英をしのぐ第一の顧客になっていることを考えれば、別に不思議ではない。ただ、マレーシア文部省がそれを考える理由のひとつに、『中国系の生徒は「マ・英・中」と三つのメディアをもつのにに対し、マレー系生徒は「マ・英」の二つだから、これを三つにすることが望ましい』といった説明をきくと、どうも分からなくなってくる。中学に日本語課程がおかれるのは、うれしいことだが、その日本語課程をとるのは、選択というのなら、マレー系でなく中国系の生徒ではなかろうか。マレーシアの経済をおさえ、インテリの養成所の3分の2をおさえつつある中国系のひとびとをかかえながら、マレイ人種によるマラヤナイゼーションを講釈されると、わたくしは「やりすぎては危ない」という不安をかすかに感じるのである。

ともあれ、もし中学にも日本語が選択科目として位置づけられれば、大学の日本語の将来はますます明かるい。栗本・前田両君のクラスの学生たちは、いま、Malaysian Society of Japanese Languageをつくる下準備を進めている。将来、このような Society が中心になり、マレーシアの日本に対する関心と理解がいちだんと伸びることを切に願っている次第である。

カンボジア便り

坂 本 恭 章

I

プノンペンに到着した日の夜、カンボジア語の先生になってくれる人、わたくしを下宿させてくれる人、その他もう1人の計3人のカンボジア人と夕食を共にしたが、かねてからの、カンボジアの土を踏んだらカンボジア語しか使わないとの決心通りに、席上何とかカンボジア語で過ごすことができ、それまでの暹羅の上の水練も、あながち無駄ではなかったと、嬉しくもあり、またやや得意でもあった。(もっとも現在では、空港やホテル、郵便局の中、それに警官に呼びとめられた時などのように、外国人であることを早く知らせたほうが有利な場合は必ずしも決心を守っているわけではない。)

下宿が壁の塗りかえ中で、やむなく安宿にひとまず落着いた。翌朝、市場の方角を女中にたずねると、広東語しかわからないという。おまけに文盲で筆談もできない。フロントは空っぽなので、いいかげんに見当をつけて歩き出すと、200mも行かないうちに中央市場に出た。ちょうど道角に半分露店の食堂があったので入ろうとすると、店員にいきなり「出ろ」といわれて驚いた。まだ何もしていないのに追い出される覚えもないし、「出ろ」

は「チュニユ」[ceɲ] だが、今のは「チュニユ」[cəɲ] に聞こえたので、エッと聞きなおすと、近くの椅子を引いて、「チューニユ」と指すので坐れということらしいと安心して腰掛けた。まわりを見まわすと、ラーメンのようなものを皆が食べているので、あれをもってこいと命じる。食べてみるとなかなかおいしい。勘定をさせる頃にはもう外国人であることを見破られていて紙片に数字を書いてくれた。このラーメンを覚えておこうと、名前をたずねると、ラーメンが5リエルで、コカコーラが5リエルで、この点心が2リエルという返事。この料理がたいへんおいしいから、名前を知りたいんだといくら説明しても分かってくれず、会計に文句をつけているものと誤解していて、加算の正しいことばかり説明してくれる。とうとうカウンターに坐っていた人がやってきて、「どうしましたか？」と日本語でたずねられた時には、昨夜の自信はすっかりどこへやらであった。

下宿に落着いてからも、官吏である主人とリセーの学生である長男の話すことはだいたい分かるのであるが、小さな子供や主婦、それに主婦の両親の話がさっぱり聞きとれない。街に出て買物をする時も、あまりスムーズとはいえず、長男にカンボジア語とカンボジア語の通訳を頼むほどであった。これらは、プノンペン方言と標準語との差異に起因するものであった。

学校では、正書法に基づいた発音を教え、これが良い上品な言葉とされている。学校教育を受けた人はこれを話することができるが、そうでない人は、普通、友人や家族間で話されている俗語しか話せない。もっとも、ラジオ等の普及で、全然分からないというわけではないが、無理に標準語を話そうとして、全然違う形をこしらえて話しかけてくることさえある。その上、商店員はほとんど全部華僑であるので、中国語なまりで話すので、それ

まで標準語しか知らなかったわたくしには、
さっぱり理解ができなかったわけである。

この方言と標準語がどのように異なるかを
簡単に説明したい。

1. 2音節語の第1音節が摩滅して、ほと
んど単音節語化する。(カンボジア語では、
単音節語と2音節語が大部分である。)

例えば

カニョチヨク [kaŋcak]
→カチヨク [kəcak] <ガラス>
カムバット [kambət]
→カバット [kəbət] <ナイフ>
チョムグー [comɣuː]
→チグー [cəɣu] <病氣>
サンダエク [sandaek]
→スダエク [sdaek] <豆>
サムペア [sampeax]
スペア [speax] <拝む>
ピダーン [pidain]
→プダーン [pdain] <天井>
ドンカウ [daŋkəu]
→タカウ [təkəu] <虫>
ドムナウプ [damnaəp]
→タナウプ [tənaəp] <モチ米>
ボンハーニョ [baŋhaːn]
→パハーニョ [pəhaːn] <示す>
ボンヴル [baŋvuːl]
→パヴル [pəvuːl] <回す>
チャニョチャム [cəŋcəm]
→ニョチャム [ŋcəm] <養う>
チョニョチュエアング [cəŋceəŋ]
→ニョチュエアング [ŋceəŋ] <壁>
ボニョチー [baŋciː]
→ニョチー [ŋciː] <表>
トンサーイ [tənsaːi]
→ンサーイ [nsaːi] <兎>
ボントップ [bantop]
→ントップ [ntop] <部屋>
コンカエプ [kaŋkaep]

→ンカエプ [ŋkaep] <蛙>
ロンヴォアン [rəŋvoən]
→ンヴァン [ŋvoən] <賃>
ヴォンヴェーグ [vəŋveːŋ]
→ンヴェーグ [ŋveːŋ] <迷う>
アムバル [ʔambəl]
→ムバル [mbəl] <塩>
ボムポング [bampəŋ]
→ポング [pəŋ] <管>
ソーセー [səːseː]
→セー [seː] <書く>
ピーサー [piːsaː]
→サー [saː] <飲食する>
アニョチャング [ʔaŋceŋ]
→チャング [cəŋ] <そのように>
アニョチューニョ [ʔaŋceːn]
→チューニョ [cəːn] <どうぞ>

2-1) 二重子音中の [r] は消える

クラブー [krapeː]
→カプー [kəpeː] <ワニ>
チラモホ [cramox]
→チャモホ [cəmoz] <鼻>
トラチュク [traci·ək]
→タチュク [təci·ək] <耳>
プロニャプ [praŋap]
→パニャプ [pəŋap] <急ぐ>
プレイ [prei]
→ペイ [pei] <森>
クレー [kreː]
→ケー [k'ɛː] <ベッド>
クラハ [krax]
→ケアハ [k'eaː] <厚い>
プラム [pram]
→ペアム [p'eam] <5>
スラー [sraː]
→セヤー [sejaː] <酒>
トライ [trəi]
→タイ [t'əi] <魚>
チュルーク [cruk]

- チューク [c'u:k] <豚>
 クラオム [kraom]
 →コーム [k'o:m] <下>
 クラオイ [kraoi]
 →コーイ [k'o:i] <役>
 2-2) 単独の [r] は [h] になる
 リーク [ri:k]
 →ヒーク [hi:k] <拡がる>
 リエン [ri:ən]
 →ヒエン [hi:ən] <習う>
 ルング [ruŋ]
 →フング [huŋ] <硬い>
 ローム [ro:m]
 →ホーム [ho:m] <毛>
 3. その他にも
 トマイ [t'məi]
 →クマイ [k'məi] <新しい>
 チマー [c'ma:]
 →スマー [sma:] <猫>
 ゴグット [ŋoŋut]
 →ラグット [laŋut] <暗い>
 等といういろいろあり、
 ソック・ペアング [sok peaŋ] がスロック
 ・バラング [srok baraŋ] <フランス国>で
 あることが分かるまでには、しばらく会話を
 中断して考えなければならない。
 さらにこのほかに
 クニョム [k'nom] → ニョム [nom]
 または→キニョム [ki:nom] <私>
 プロボン [propon]
 →ピーングポング [pi:ŋpo:ŋ]
 <妻>
 ポンマーン・カエ [ponma:n k'ae]
 →マーン・ケー [ma:n k'e:]
 <何カ月>
 プサー・トマイ [psa: t'məi]
 →サカマイ [sakamai] <中央市場>
 のような、中国・ベトナムなまりのカンボジ
 ア語も広く使用されているので、全く頭が痛

くなってしまう。

日本からのお客と話しこんでしまった深夜
 の帰途に不審尋問され、ついカンボジア語で
 応対したため、パスポートを見せるまでは日
 本人と信じてくれず、連行されかけたりした
 のも、要は怪しげなカンボジア語を話す変な
 カンボジア人がいくらでもいるということな
 のである。

II

9月中旬に、バットンバンにある農業セン
 ターの木村氏にアンコール見物につれていっ
 ていただいた。

ちょうどメコンの最増水期で、新聞等はビ
 エンチャンの水害を報じていた。道中、一面
 の水で、水田は全く水没しているもの、稲の
 葉先がわずかに水面に出ているものとまちま
 ちであった。民家もかなりが床上浸水してい
 て、住民が自動車道路の端の舗装していない
 部分に掘っ立て小屋を建て、牛をつないで暮
 らしているのが交通をやや妨害している。そ
 うして、この道路が一種の堤防になっていて、
 道路の左側の水位のほうが右側に比べて少々
 高い。ところで、トンレーサープ川は道の右
 側を流れている。飛行機から眺めた様子では、
 いかにもメコンなり、トンレーサープ川が溢
 れた感じであったが、実はそうではなくて、
 現在水田を水浸しにしている水は、天から降
 った水が、トンレーサープ川にまだ流れこめ
 ずにいるらしい。つまり国土の大半が水たまり
 になってしまったのではないかと思われた。

バットンバンからシエムリエプの間のほう
 が水害がひどいようであった。

見物をすませて、日が暮れてから帰途につ
 いたが、驚いたことに道路が冠水している。
 特にひどい雨は降らなかったはずだがと住民
 にたずねると、遠くでたくさん降ったからだ、
 という返事であった。

冠水している部分をいくつか通りこして帰

路を急いだが、とうとう 30cm もの深さがある所につかり、早く向こうの小高い部落まで行かないと明朝にはもっと深くなるぞと脅かされながら、ようやくのことで戸数 200戸あまりの部落にたどりつき、それから先はこのあたりで最も低い所ときいて、あきらめて車中で一泊することに決心した。

寝支度をととのえていると、さきほどこの先は水深 50cm くらいあると教えてくれた人が引き返してきて、自分はこの村の学校の教師だが、わたくしの家に泊ってはどうか、と親切にすすめてくれるので遠慮なく家に上がりこんで、いろいろな話をきいた。

戦時中に日本軍が規律正しく、かつ住民に親切であったこと、この後再びフランス軍がやってきた時に、日本兵と結婚していた婦人を皆でかくまったこと、将校が記念にと残していた軍刀などを見せてくれたりした。

この日本軍占領時代の頃の話は、その後もたびたび耳にしたが、すべて良い思い出話ばかりで、この国ばかりは戦争の時の話がでても、安心して聞いていられるようだ。アメリカの原子爆弾さえなかったら、日本は勝つだろうに残念だった、と皆でなぐさめてくれたことすらある。

このように、少なくとも一般大衆には、日本の人気はとても良い。シクロに、日本人がカンボジア語を勉強してくれるとはとても嬉しいと感激されたり、雑貨屋の店先で、華僑である主人が中国語を紙に書いてわたくしに読ませ、このように日本と中国とは同じ文字を使っている兄弟である、自分のほうが、カンボジア人よりも日本人に近いんだと、その場に居合わせた人々に自慢をしたことすらある。ただ、日本兵の印象がよほど良かったのか、それともムッシューが来るぞ、といえ泣く子も黙ったといわれるフランス人を追っ払ったのが忘れられないのか、あるいはその後、これといった感心すべきことがないのか、日本

に関する良い話はいつも20数年前のことに限られているのは、いささか淋しいことである。

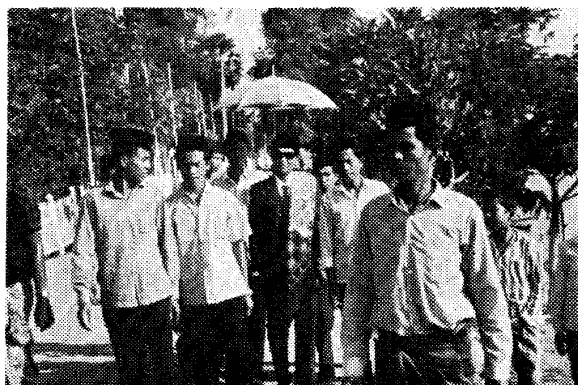
翌朝目をさましてみると、なんと向こうの小高い丘まで約 4km の間が大河と化して、濁水がとうとうと流れている。しかも、どう楽観的に眺めても水位は昨夜と同じくらい、むしろ高くなっているようである。一週間くらい水はひかないという話をきいて、乗用車はそこにおき去りにして、腰が高くディーゼルで、少々の水にはビクともしないバスでセンターまでたどりついた。その数日後には、このバスさえ不通になってしまい、数年来の大洪水ということであった。

これを機として、トンレーサープ川は向きを変え、メコンへと流れはじめた。5月現在、トンレーサープ川はほとんど水流がとまっており、水位が最も低いのではないかとと思われるのであるが、最高水位の時と比べると、その差はだいたい 6～7 m くらいではないかと思われる。わずかこれくらいの差で、はるか 200km も先の大湖が何倍にもふくれ上がり、ひいては大洪水をひき起こしたり、そうかと思うと、乾期にはからからに干上がってしまうのであるから、ダムを作って灌漑すれば、米はいくらでもとれるのではないかと一口にいっても、なかなか大変なことだろうと思われる。現にダムを作る計画があると耳にしているが、ダムに水が 6～7 m もたまった時には、国土の大半が洪水になっていた、などということになるのではないかと素人のわたくしには心配なことである。

III

日本の技術者が建設したのが、日本の援助でできたと誤報されて、いつも問題を起こす民社同盟大橋をトンレーサープ川の対岸へと渡った所にチャムの部落がある。ここでチャム人と知合いになることができた。

この時同行していたカンボジア人が翌日わ



チャム人の結婚1 新郎は舟から上陸してモスクに入る。



3 ついで、他の人々とも挨拶、両手をさし出して互いに片手をはさむ。



2 モスクの中でお経を唱え新婦の長兄（父親が故人となっているので父の代理）と握手して、これで婚姻が成立。在席は男性のみ。



4 婚姻が成立してから、新婦と初対面しベッドの上に並んで坐り、右の身体だけ写っている人のお経を聞く。列席するのは女性のみ、特別の好意でわたくしに列席、撮影を許可してくれた。

わたくしの所に来て、これからはわたくしとの交際に充分気をつけて、恨まれるようなことをしないようにしなければならないという。つまり、あのチャム人は呪術を心得ているから、わたくしがかれに頼んで呪い殺すかもしれないと心配しているのである。この呪術（トヴァー・アムプー [t'və: ʔampe:]）は信じる人が多く、リセーを卒業した青年ですら信じているようである。呪われた人の腹中に小さな針が口から入り、それがだんだんと大きくなってついに絶命する。針でなくて、水牛のことも多い。そうして、これは呪術であるから医者には分からない。モンゴル・ボレイの日本人の医者（医療センターのこと）のレントゲンですらだめで、3日と経たないうち

に死んでしまうのだそうである。入れ墨をしている人が多いが、これは、その呪術から身を守るためである。このような魔力を供えた人はあちこちにいる。インフォーマントの友人に、大勢の人と一緒に写真を撮っても、決してフィルムに写らない人がいると聞いて、ぜひ撮らせて欲しいと頼んだところ、わたくしのカメラは上等だから、そのカメラの力には勝てそうにないと断わられてしまった。高級カメラの魔力には勝てないのだそうである。もっとも、わたくしのカメラも、アンコールワットの夜の踊りを撮影して帰ったところが、写っているのは人間だけなので、なんだワットの威力にはかなわないではないか、と評判が落ちてしまった。またこの呪術は病気の治

療にも使われる。普通の風邪とか頭痛腹痛は、昔の貨幣とかスプーンとかで、ゴリゴリと身体をこすって皮下出血させると治ってしまう。わたくしも一度してもらったが、欠けた茶碗に薬が入っていて、それをちょっと塗ってはゴシゴシとこする。この薬がなんだかなじみのある匂いなので名前をたずねると、石油という返事であった。これで治らない時に先生（ローク・クルー [lo:k kru:]）を呼ぶ。たいていは呪文を唱えて、プッと息を吹きかけた水を飲むことになるのだそうだが、重病の時には秘伝の薬を調合する。わたくしのインフォーマントの1人もこれを心得ていたが、その最も得意とするのは、古文書を焼いた灰とすることだった。五、六人もの人にかかっても治らなかった精神病の娘もこれで良くなったそうである。

麻疹にかかった子供に人糞をよく乾かしたものを飲ませるのは、かれに限らず広く行なわれているとのことであるが、抗体が糞に出るものなら医学的に根拠があるかもしれない。

呪術でもう一つ有名なのは、スナエ[snae]である。これは、依頼して作ってもらったところの、呪文のこもった薬を目指す相手の身体に塗っておけば、その人の魅力のとりことになってしまうという媚術である。第二王妃が正妻の地位を奪わんとして、これを用い、首尾よく第一王妃を追いつき出すことに成功するが、ついにスナエを用いたことが露見して、象に踏み殺させるという死刑に処せられるという映画もあったが、伝説等にもよく出てくる。現在でも、ダンスホールのダンサーが、客がつかないと収入にならないので、金持の客にスナエをかけて、毎夜自分の所に通わせるが、せっかくこうして得た収入も大半がスナエ代として消えてしまうとのことである。

留学期間の残り2カ月のあいだに、誰かわたくしにスナエをかけてくれないかと期待しているしだいである。

国際稲作研究所より

法 貴 誠

I

今年の1月26日にフィリピンの国際稲作研究所(The International Rice Research Institute 略して IRRI)に research fellow として来て以来5カ月近くになる。こちらの研究所には今までにも日本から多くの方々が訪問されており、またここで研究に従事された方も多い。IRRI のことについては以前に research fellow としてこちらで研究生活を送られた京大農学部の高村泰雄氏の報告(『東南アジア研究』3巻1号, p. 144)にも詳しい。わたくしは今のところ研究所の中にいることが多いので、こちらの事情については一部のことを理解したにすぎないが、今までに見たり聞いたりし、感じたことなどを思いつくままに書いてみようと思う。

II

研究所はマニラの東南約70km のところにあり、車で約1時間半の道程である。ハイウェイと呼ばれている国道を走るのであるが、日本のハイウェイとは大違いである。道路幅は日本の一級国道ぐらいはあるが、ところどころ舗装がやぶれ穴があいている。しかし、ここを走る車は多く、しかもみなひじょうに

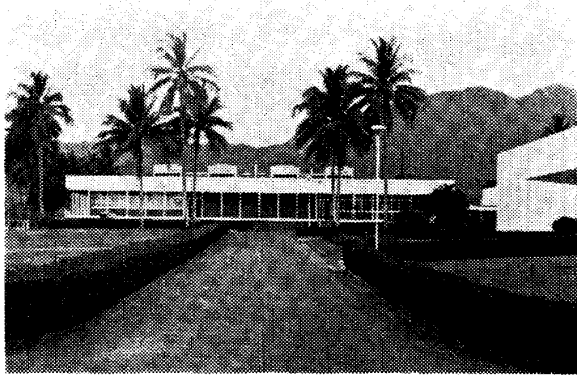


写真1 IRRIs の Laboratory 外観

スピードを出している。とくに、アメリカ製の大型トラックを改造した強力なエンジンを持つ長距離バスは乗客を満載し、時速 90km くらいでとばす。制限時速は 50km であるが全然気にしていない。しかも、対向車が少し途切れたわずかの間をぬってどんどん追い越しをやる。乗っていても危なっかしくて見ていられない。時々事故が起きる。バスに当てられた方は即死であり、バスの乗客も 20 人くらいは死ぬことがある。新聞にはでかでかと写真がでるが、交通事故の防止はこちらでもなかなか難しいようである。

このハイウェイを走ること 64km、ここで十字路を右に折れるといよいよ IRRIs も近い。このあたりロスバニョス (Los Banños) という小さな田舎町の一角で、道の両側には住宅、小さな食堂、雑貨店などが並んでいる。また洋服の仕立て屋、散髪屋、映画館、ボーリング場も見られる。これらを左右に見ながら 2km も行くとゲートがあり鉄砲を持った守衛が立っている。これよりフィリピン大学農学部 (University of the Philippines, College of Agriculture 略して UPCA) の構内でありこの中に IRRIs の建物がある。あちこちに点在する UPCA の各研究室の建物を見ながら、バナナやココナツの森の中をぬって行くと視界が開け田んぼが目に入ってくる。これらは大学の農場であり、この中をコンクリート舗装された一直線の道が走っている。道の両側に

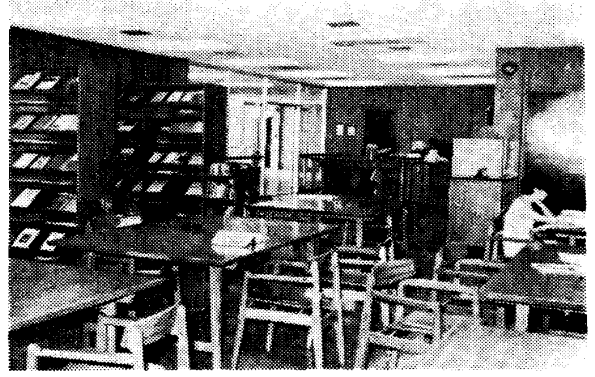


写真2 図書館

はピリという木が植わっており、この道路をピリドライブと呼んでいる。ここから IRRIs への専用道路である。はるかかなたの田んぼの中にモダンな IRRIs の建物がぼつんと建っている。しかし近づいてみるとなかなか大きく、白い建物を一見した感じでは日本の化学メーカーの研究所といったところであろうか。稲作研究所という言葉から描くイメージとは全く異なっている。ここでまた IRRIs の守衛の敬礼を受け中に入ることになる。大事なお客とみれば、守衛が玄関の噴水のスイッチを入れ高々と水を噴き上げ歓迎する。

さてこの研究所は Administration Building, Laboratory, Cafeteria と Dormitory, それに Service Building から成っている。Administration Building の中には図書館、大講義室、郵便部、会計部、庶務部、広報部、写真部、出版部などがある。ここからマニラホテル内の IRRIs の事務所へは毎日 1 回専用の郵便車が往復している。またこの事務所と IRRIs との間には無線電話が通じているのでいつでも連絡がとれる。これらの施設は一見あまりにもぜいたくすぎるという感じがするのであるが、これは逆にいえば、この土地がこのような施設を作らなければ研究活動ができないほど不便な状態にあるということにもなる。事実、例えばここからわずか 70km のマニラへの市外電話がうまく通じないような状態なのである。200 名を収容する大講義室

では毎週木曜と土曜にセミナーが開かれ、チャンドラー所長、マックラン副所長以下各部門のスタッフ、助手、研究生が出席する。木曜セミナーは程度が高く、テーマは稲作に関する専門的なことから「IRRIの将来」あるいは「国際的協力のあり方について」などと変化に富んでいる。土曜セミナーの方はIRRIとUPCAの大学院学生を対象にした講義といった傾向が強い。この大講義室には映写設備を完備しており、毎週水曜日夜方には映画会が行なわれている。スタッフの家族もよく顔を見せる。

Laboratoryには、植物生理学、化学、品種改良学、植物病理学、昆虫学、農学、土壌化学、農業経済学の各部門の研究室および実験室があり、スタッフ以下助手、研究生が研究を行なっている。Cafeteriaはセルフサービスであるが、京大の食堂のように食器をもとに戻す必要はない。ここで使っている米の品種は日によって変わるため、米の味から粒の大きさ、舌ざわりががらりと変わることがある。とくに最近はこの研究所で作り出した新しい品種がよく使われる。このときは品種名が食堂に掲示され宣伝に一役買うというわけである。

さてLaboratoryから少し離れたService Buildingには、自動車整備部、電気部、木工部、塗装部、修理部、消費物資の支給部などがあり70haの実験農場やその他のあらゆる

施設の管理を行なっている。そしてわたくしの属している農業工学部門のみがこのService Buildingの中に研究室と作工場を持っている。研究室の人員は、室長のMr. Loyd Johnson (米)、フィリピンの農業経営についての研究を行なっている特別スタッフのDr. Stanley Johnson (米)、それに東京大学に留学してマスターを取った助手のMr. Emilio Casem (フィリピン)、フィリピン人の研究生3人、秘書が2人、タイピストおよび製図工がそれぞれ1人といった構成である。また作工場には機械工3人、溶接工2人、板金工1人、それにトラクターのオペレーターが1人おり、ちょっとした町工場のような感じである。

今までにこの研究室でやってきた研究は、水田用のトラクター車輪の開発、ハンドトラクターの利用試験、用水量に関する研究、耕起の深さと収量の関係についての研究、植付け間隔の研究、コーン型脱穀機の開発などとひじょうに広範囲にわたっている。しかしどちらかといえば浅く大まかな研究が多かったようである。今年にはフィリピンでまず最初に問題になる耕うん整地用機械の研究に重点がおかれている。こちらではかんがい施設がない水田が大部分で、乾季の末には土壌が乾いてひじょうに硬くなる。このため畜力では耕うんできないので雨期がきて土壌が十分柔らかくなるのを待って耕うんしている。しかし

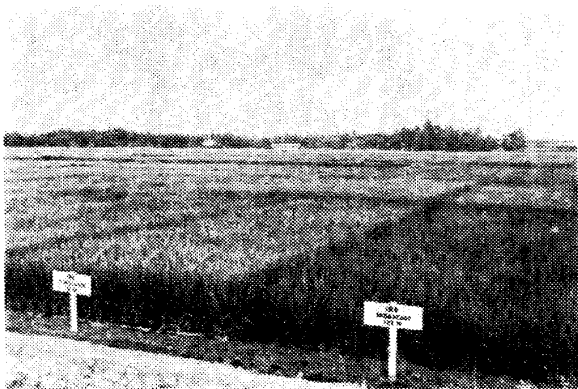


写真3 IRRI の試験圃場

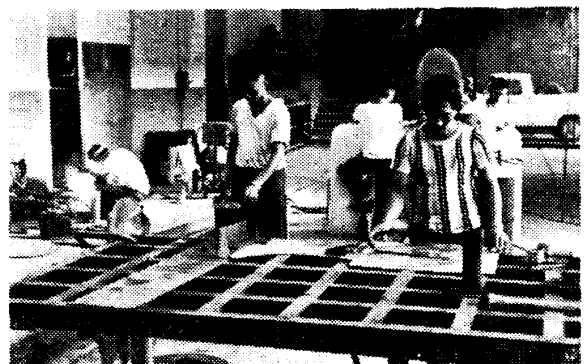


写真4 農業工学科の作工場

お天気まかせでありひじょうに不便な点が多い。また日本製の小型ロータリーティラーを使っても深く耕うんできないし、場合によっては全く耕うん爪がはいらない。現在まずこれらの問題の解決が望まれているのである。これを解決する一つの試みとして、こちらの研究室では大型トラクター（40～60馬力）用、幅4～5mの強力なロータリーティラーの開発を行っており、私もこの研究の一部を担当している。今3番目の試作機を作っているところであるが今後、重量、碎土性能、トラクターとロータリーティラーとのバランスの問題を考えなければならない。この大型ロータリーティラーはフィリピンおよび東南アジアの水田地帯における請負いによる耕うん整地作業の合理化を目的としたものである。

Ⅲ

さて IRRI と UPCA のあるこの町ロスバニョスの様子を少し述べておこう。この町はフィリピン最大のルソン島の南部にあり正確な位置は、北緯 14°10' 東経 121°15' である。琵琶湖の数倍あるフィリピン最大のラグナ湖の南端に位置する。西にはマッキンレーと呼ばれる1000mくらいの休火山がそびえ、このあたり一帯は温泉地帯でもある。気候は、近くにラグナ湖があるためか、マニラよりはやや涼しい。12～5月が乾季、6月～11月が雨

季となっているが、4、5月を除いては乾季といっても雨は少々降り、厳密にははっきりした区別はつけにくい。この町の人口は約15,000人で多くは農業およびラグナ湖での漁業に従事している。また家畜、家禽を飼う家も多くブタ10～20頭、アヒルまたはニワトリを100～200羽所有しているのが普通である。その他雑貨店や食堂などをやっている者も割合多い。また IRRI や UPCA で働く人の数も多く、学生のための下宿屋をやっている者も多数に上る。IRRI ができてからこの町も相当変わったと聞いている。

この町の娯楽といっても大したものはないが、筆頭は映画であろう。映画館は2軒あるが掘っ立て小屋を少し良くしたような感じの建物である。料金は70円で2本立て4時間というのが普通である。ほとんどがアメリカ映画である。もちろん冷房はないので皆汗をかきながら見ている。ボーリングもひじょうに盛んで、この町にも6レーンのボーリング場が1軒ある。といっても日本にあるような上等なものではない。こちらでは倒れたピンを立てる自動装置がなく、従業員が上半身はだかで汗をふきふき倒れたピンを並べなおし、玉をこちらにころがす。それでも労働力は豊富だから料金のほうは格安で1人1ゲーム35円と日本の1/10である。土曜日などには全レ

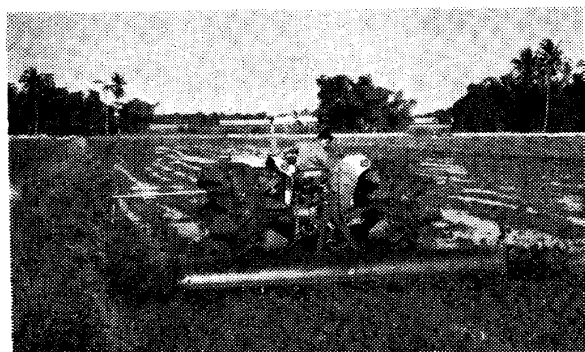


写真5 農業工学研究室で試作した大型ロータリー（幅5m）による代かき作業



写真6 フィリピン古来の脱穀法の一例（稲を手で洗濯板のような台にたたきつける）

ーンを IRRI の連中で占領することも多い。

こちらでは高級なレストランで食事をしないかぎり、食べ物はいじょうに安い。100円も出せばたっぷり食べられる。また上等のバナナが1本5円、コカコーラは20円である。一方、住のほうはこちらでも相当高くつくようである。この町で2部屋借りると月5,000円～8,000円、大学の構内では同じく2部屋借りて8,000～15,000円であるからフィリピンの一般の人々にとっては大変である。また家を建てるには2部屋のもので土地代ぬきで60～100万円 かけると聞いた。ニッパハウスならばもっと安いであろうが、最近はニッパハウスを建てる者はいないということである。こちらでは手間賃が安いので服の仕立て代などはあまりかからない。ズボン1着の仕立て代が400円くらいである。材料費のほうはやや高いがズボン1着分で1,000円 出せば相当いい物を買う。

さてわたくしの部屋の秘書が最近結婚したのであるが、両親のいる郷里に一度帰り女中を1人つれてきて IRRI 近くに家を借りて住むという。新婚で女中を雇うなどということは日本ではとても考えられないから、最初かの女は相当な財産家の娘だろうと想像していた。しかしその後の様子を見てみると、家賃の心配、家具や日用品の準備などこまかいことにまで相当気をくばっている。聞いてみたところお金が足りなくて苦労しているという。そこで女中を雇える身分でお金がないとはおかしいと思うがと質問したところ、こちらで女中を雇うことは何でもないのである。家賃や家具はいじょうに高いが女中はいじょうに安く雇えるのである。女中1人月3,000円で雇えるということであった。日本の1/10くらいであろうか。もちろん食べさせ衣類は与えなければならぬが、自宅で料理する限り食費は問題にならない。また衣類は安い材料で作れば仕立て代はあまりかからないから女中を

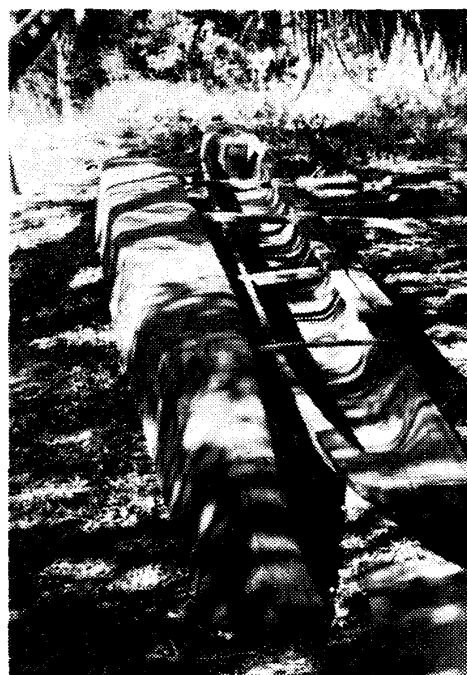


写真7 ラグナ湖で漁業に使う
くり抜き船

雇うのはいじょうに簡単なのである。それより家具や日用品の準備がたいへんである。テーブル、椅子、戸棚、たんすなどはこの町にはほとんど売っていない。マニラに行けばショーウィンドーには立派な家具類がかざってあるが、とても一般人に手の出る代物ではない。ところがうまくしたもので、家具類を作る素人大工がたくさんいるのである。技術はやや悪いが安くて十分に実用的なものを作っている。フィリピン人の家に招かれるとたいいてい、家にあまり上等ではないが割合たくさん家具がそろっている。これらはみな素人大工に注文して作ってもらうのである。場合によってはテレビの外側の箱まで作る。中は別の素人電気屋が材料を集めてセットするのである。これら種々の技術を持っている者はフィリピンには相当多いようである。現在フィリピンの総人口は3,400万人、労働人口が1,200万人といわれ、その内失業と半失業を合わせて200万人に達するといわれている。しかし、失業者の中には正式の職はなくても各種の技

術を持ち、それで十分に生計を立てている者も多いのではないかと思う。

フィリピンに来て驚いたことは、銀行は言うにおよばず商社その他のあらゆるオフィスに鉄砲を持った守衛がいることである。今は慣れたが最初は無気味で近づきにくかった。マニラのある日本料理店では鉄砲を持ったドアマンが立っている。聞くとところによるとギャングがまだ少しいるそうであるが、最近はまだ問題にするほどのことはなさそうである。こちらでは警察力が日本ほど強くないため自然と自衛するという傾向が出てくるのであろう。しかし IRRI でも相当用心はしているようである。というのは IRRI の専用郵便車は時々マニラの銀行から研究所へ現金を運ぶことがあるが、その時はドライバーに護衛が1人つき、両者ともピストルを持って行く。そしてポケットにも少々予備の弾丸を入れて行く。こんな時は西部劇を地でゆく感じもする。

こちらの主な交通機関は長距離は前にも述べた大型バスが多く利用されているが、近距離にはジプニーと呼ばれる乗物が利用される。これはジープの後部を改造して10名余りの乗客が乗れるようにしたものである。大戦後車のない時に古いジープを改造して作ったのが始まりと聞くと、馬力があり、かつ悪路にも強いのでひじょうに普及している。今ではどんどん新しいジプニーが製造されている。普通は一定のルートを走っているが、停留場は

なくどこからでも乗れ、好きなところで降りられる。料金は10セントボス(約9円)である。数もひじょうに多く相乗りタクシーといった感じの、はなはだ便利な乗物である。さてもう一つカレッサと呼ばれるスペイン系の優雅な乗物がある。これは小馬が引く2輪馬車で最大6人まで乗れる。スピードはあまり出ないが、夕涼みや見物には格好な乗物である。これはまたジプニーでは入りにくい狭い所でもよく使われている。しかしこの乗物も最近ではだんだん数が減りトライシクル(Tricycle)と呼ぶ2人乗りのエンジン付き小型3輪自転車にとって代わられつつある。これのエンジンはほとんど全部日本製だと聞いた。

IV

さてフィリピン人の日本に対する関心は極めて高い。これは第一にひじょうに広く出まわっている日本商品のためであろう。ソニー、ヒタチ、ナショナルなどは言うに及ばず、トヨタ、ニッサン、クボタ、ホンダ、三菱、あるいはアジノモト、カミノモト、タンチョーといった広告はあらゆるところで目につく。電気製品は相当出まわっているであろうと予想していたが、その他にもあらゆる日本の製品が入ってきている。とくにマニラのタクシーは日本のコロナとブルーバードがひじょうに多く、その進出ぶりは目を見張らせるものがある。以前はドイツのフォルクスワーゲン

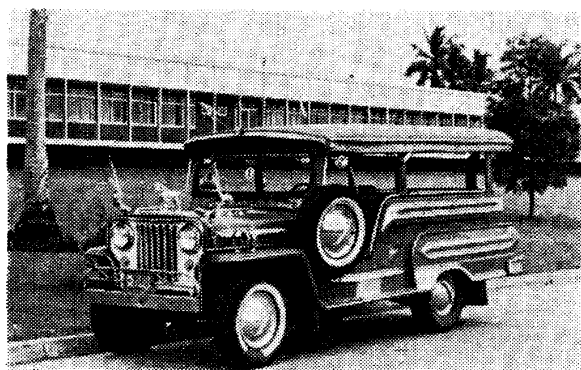


写真8 ジプニー

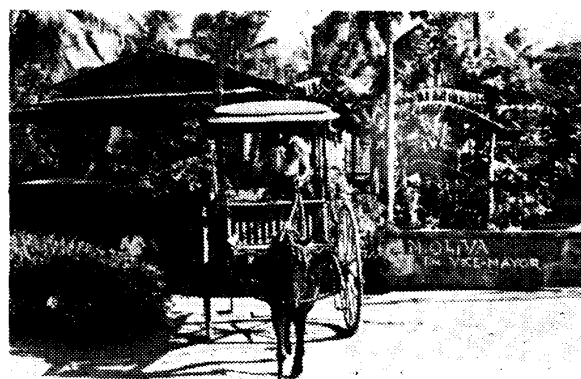


写真9 カレッサと呼ばれるスペイン系の小型馬車

が相当あったと聞くが今は影がうすい。そこでなぜフォルクスワーゲンよりコロナやブルーバードがいいのかとフィリピン人に質問してみた。かれらがあげた理由は第一にデザインが良いという点であった。これは車の性能が互角になった今日、勝負はデザインの良し悪しにかかっているのであろう。質実なスタイルで欧米では確固たる地位を築いたフォルクスワーゲンも、こちらではもはや好みに合わなくなっているようである。しかし日本製のタクシーだからといって安心して乗ると料金をぼられることがある。とくに初めてフィリピンに来た日本人があぶない。料金メーターの読みはペソであるが、相手がフィリピンの事情に通じていないと見るとこれをドルで要求する。為替率は約3.9であるから3.9倍の料金を払わされることになる。日本人がよくねられるのは対日感情とはあまり関係はない。要は日本人は英語がうまく話せない場合が多いのと、割合金を持っているということになっているからである。

概して日本人の評判は良い。最近では生け花、空手、柔道なども流行のきざしを見せている。UPCA では時おり生け花の講習会が開かれ、おやっと思うことがある。マニラには無数の空手、柔道の道場ができています。しかしこれらの道場にはいいかげんなものも多いと聞いた。フィリピンの大学の中には日本語コースもだいふんできているようである。日本史を習ったという者も多い。頼朝、家康というような言葉をフィリピン人から聞かされて驚いたことがある。フィリピン側では日本から多くのものを学ぼうとする姿勢は相当強いものがある。その点日本人のフィリピンに対する知識の乏しさ、関心の薄さということは問題であろう。しかし日本が誤解されている面も多いことは確かである。キモノ、ゲイシャ、ハラキリとくるとあまり調子がよくない。どういう訳か日本女性はみな着物を着ており、



写真10 各国から来ている trainee
(短期研修生)の田植え実習

かつ芸者であって、ハラキリが今でも行なわれていると思っている者もいるから困る。ハラキリをやってみたくれと頼まれたことがある。また日本は男尊女卑の国であり、女性は男性と行動を共にすることができない、食事にも同席できないというふうに考えているフィリピン女性が一部あるのには驚いた。これらは日本とフィリピンとの交流が不足していることが原因であろう。しかしフィリピンにやってくる日本人が増えたこと、また農業技術などのトレーニングで日本に行くフィリピン人が増えたことと相まって、日本に対する理解は急速に深まっている。戦争の傷あとが完全に癒えたと考えるのは間違いであろうが、対日感情についてもひじょうに良くなっていることは事実である。

現在 IRRI には research fellow, research scholar, trainee など合わせて80名がいる。ほとんど世界のあらゆる国々から来ており日本、韓国、台湾、フィリピン、タイ、インドネシア、インド、パキスタン、セイロン、ネパール、カイロ、ナイジェリア、オランダ、ドイツ、アメリカと実に国際色豊かである。時々開かれる歓迎あるいは送別パーティーには各国の民族衣装が見られる。また各国の民謡や踊りが楽しめるが、これらは IRRI ならではのことであろう。ここに来ている者はみな行儀がよい。とくにカイロから来ている

research fellow, ナイジェリアの research scholar などには紳士然としておりたいへん感じがよい。ここでユニークな位置を占めるのはインド、パキスタン人であろう。かれらはプライドが高く、ややつき合いにくいというのが相場である。何事についても知らないと言うことをひじょうな恥と考えているようである。だいたい日本語を二、三語知っていれば俺は日本語が話せるとくる。それに実に聞き取りにくい英語でまくしたて、こちらがお前の発音は悪いとでも言おうものならかんかんになって怒る。しかし根はたいへんいい人間であり変な後くされはない。かれらは他国との習慣や文化の相違もあり、一つの独自のグループを形成している。その他の国々の間には大きな習慣の相違もなく自由につき合える。しかしアジア人グループと欧米人グループに分かれる傾向がある。東南アジア各国の人達と欧米人とのつき合いというのはお互いに少しやりにくそうである。これは言葉の点で何ら障害のないフィリピン人とアメリカ人との間でもいえることである。皮膚の色や文化の相違と共にやはり以前植民地であったということが両者の心の底にあるように思われる。その点日本、韓国、台湾、タイなどは英語のニガ手なグループであるが、欧米諸国の植民地になったことがないため、どここの国とも自由につき合っている。とくに日本人は東南アジアの国々の間では評判がよい。あるオランダ人は日本も欧米と同じように東南アジアで植民地政策を行なったのに、こちらでは日本に対する批判を聞いたことがないのはわからないと、わたくしに語ったことがある。この理由は日本人であるわたくしにもわからない。しかし日本が将来はたすことができる役割はわかるような気がするのである。

ビルマの現状

大 野 徹

10年ぶりのラングーン

1967年5月27日。ちょうど正午に羽田を飛び立った BOAC 機は、午後4時に香港に到着、約1時間休憩した後南支那海を経て戦乱のベトナム上空に進入、ゆっくりと蛇行するメコンの大河を眼下に見おろしつつ、やがて緑豊かなチャオプラヤー平野を横断、次第にビルマへと接近した。タイからビルマへかけての上空には、インド洋から運ばれてくる雨雲が幾重にもたれ込めていて、このあたり一帯に既に雨期が訪れていることをはっきりと示している。機窓から眺めた下ビルマ（南部ビルマ）の風景は、見渡す限り一面の水田で、



写真1 南部ビルマの水田

ビルマ経済の最大の支柱ともいうべき米の主産地が、ここからイラワジ川下流のデルタ地帯にかけて広がっていることを教えてくれる。

水田の各区画がはっきりと識別できるようになり、マッチ箱のように密集した農家が椰子の木の間を通してクッキリと見えるようになってきたと思ったとたん、飛行機はミンガラドン空港の滑走路の上に舞い降りていた。時刻は現地時間のちょうど午後6時。1958年11月、この空港からビルマに別れを告げたわたくしにとっては、まさに10年ぶりのラングーンである。

東京や香港の空港ビルとはおよそくらべものにならない小じんまりとした空港オフィスで、携行品の持込申請、保有外貨の届出等を含む一連の入国手続を終えたわたくしは、在ビルマ日本大使館やコロボ計画派遣専門家等関係各位の出迎えをうけ、車でただちにラングーン市内に向かった。ミンガラドン空港からラングーン市内に向かう道路は、広いとはいえないけれどもよく舗装されたアスファルト道路である。周辺の景色は、わたくしの眼には10年前とまるで少しも変わりがないように感じられる。ところがしばらくして、民家の看板や道路脇の標識板等に書かれたビルマ文字の中に周囲の風景とは何となくそぐわない単語が頻出しだしたことに気がついた。曰く「人民商店」「人民工場」「人民銀行」「人民警察」…… etc., 10年間という歳月の長さを存分に感じさせてくれたのが、この「人民」という言葉だ。かつて、ウー・ヌやウー・バスウェー等によって代表されていた議会民主主義制度と、1962年3月の第2次クーデター以降ネーウィン政権が終始一貫目指しているビルマ式社会主義との間の端的な違いが、いみじくもこの単語によって表わされているということができよう。

ラングーンの下町

フライン河とペゲー河との合流点から北を中心に発展したラングーンの市街は、碁盤の目とまではいかないけれども比較的良好な町である。市内を東西にはしる2本の大通りには、ビルマ史上永遠に記憶さるべき2人の英雄、マハーバンドゥーラ将軍とアウンサン将軍の名前がつけられている。南北の通りは無数にあるけれども、一部の街路を除けばあとは比較のおぼえ易い。すなわち、西から東に向かって1番街、2番街の順に番号がつけられており、一番東の端は63番街で終わる（もっとも、100番街、200番街というのものもあるにはあるが場所が違う）。この内、15、16、17番街と35、36、37番街とは華僑が多い（6月28日に発令された戒厳令の適用区域4カ所の内、中共大使館のあるハルピン街を除いて他の3カ所までが華僑の居住区域である）。

10年前、ラングーンの下町は活気はあったけれども、不潔であった。歩道には露店や屋台店が軒を並べ大勢の客が群がっていたし、紙屑やごみが散らばったままであった。路上は、まるで結核患者の咯血の跡さながら、嚙んでは吐き棄てるキンマの吐き唾で点々と真赤であった。今やそのような風景はほとんどみられない。露店は一掃され、大勢の買物客でごった返していた闇市は完全に撤去されてしまった。確かに、町並みは清潔な感じになった。だが、ラングーンの下町特有の情緒も同時に姿を消してしまった。屋台からホカホカと立ち昇る湯気、大きな井の中に入ったカウスウェーやモンヒンガー等のビルマ風麺類、井をかかえたまま立ったり坐ったりしてそれらをかき込んでいた客達の姿。一昔前のビルマの下町風景はもはやみたくてもみられない。

下町の住民は、大半が華僑である。戦前のビルマ旅行記の類には、よく「ラングーンは

インドの一都市であるような感じがする」と書かれていたほど多かったインド人の姿は、今ではぐっと少なくなった。独立と同時に帰国した人、次々と実施される国有化政策、重ビルマ主義政策によって居づらくなり自らビルマを去って行った人、ナショナリズムの台頭と戦前から存在していた反インド人感情、歴史政権の対インド人政策等々、さまざまな理由、さまざまな事情によってラングーンを立ち去ったインド人は莫大な数にのぼるだろう。

これに反して、華僑は手つかずであった。今日のラングーン下町の主要住民は、インド人にとって代わって中国人達である。そして、その中国人達が、6月27日以降発生した一連の騒動の原因となった。

一般的経済情勢

6月に入ってから、ラングーンに住む外国人の間では、米をはじめとする食糧品の買溜め傾向が目立ちはじめた。東南アジア諸国の中では自他共に認める米の生産国であるビルマ、外貨獲得の7～8割を米の輸出に依存しているビルマで、モノカルチャ経済構造の主犯のようにいわれているその米が、今年に限って極端な不作であった。その原因は、いろいろ指摘されている。曰く、作付面積の大幅な減少、曰く、反当り収穫の実質的減少、曰く、インド人労務者の大量帰国による労働力の減少とそれに伴う水田の荒廃、曰く、反政府軍の妨害活動による集荷作業の非能率化と農民の供出意欲の減退 etc. etc. ……。おそらく、そのいずれもが部分的には的を得ているだろう。だが、いつもならとくに市場に出回っているはずの米が、今年はどうしたわけか、いつまで待っても全く姿を現わさないのである。そのみならず、最大の米の消費者であるラングーン市民の手に、現実に米が手に入らなくなって久しい。

各種産業の国有化と徹底した統制経済によって、いわゆる不急不要の奢侈品の輸入はとっくの昔に抑えられたままである。食用油も、砂糖も、ミルクも、食器も、そしてロンジーの布も、あらゆる消費物資が、人民商店の配給を通じてでなければ、手に入らなくなった。それも、長い行列を作って並んだあげく、わずかな割当て量をもらうだけである。

そのあげくが、米ときた。以前なら好きなだけ買ってたらふく食っていた米が、今では人民商店の配給を通じて文字通り細々と、時によってはかろうじて1食分、2食分がどうか確保できるというような苦しい状態にまでおちこんだ。政府は、声を大にして闇商品の撲滅を叫んだ。だが、統制経済あるところ、必ず闇商売が頭をもたげる。闇商人は、発覚すればただちに刑務所行きである。にもかかわらず、闇屋は跡を絶たない。外国人や、現地人であっても一部の有産階級のように、闇であっても買いだめができる人達はまだよい。欲しくても買えない一般の消費者大衆はいったいどうなるのか。確かに、今は少々高くても金さえ出せば物が買える。だが、今年度の新米が出回るようになる11月の末まで、果たしてラングーンの台所はもちこたえられるかどうか。

政府は、必死になってラングーン周辺での米の集荷に力を注いだ。ペグー地方は、もはや底をついた。プローム地方も、ストックがなくなりつつある。後は小舟の集荷以外に頼るものがないデルタ地帯である。ところがそのデルタ地帯は、反政府軍の根強い地盤ときている。

このような客観的情勢を分析すれば、そこから得られる結論は一つしかない。暴動、米寄せ騒動、名前は何とでもつけられるが、要するに現政府の存立を脅かす最大の危機が訪れることは、疑いの余地がない。息苦しいほど緊迫したこのような経済的危機を背景に、

6月27日の緬華対立騒動が勃発したのである。

6月末の緬華紛争

6月27日午後7時20分、夕食をとりながらわたくしはビルマ語放送に耳を傾けていた。内容は、ビルマの外貨準備高について、アナウンサーがある識者の御高説をうかがうといった形式の時局解説であった。放送が一段落したと思った途端、かなり緊張した、だがはっきりした口調で「ただ今から革命政府情報省より国民の皆様に対する要請をお伝えします」というアナウンスが入り、続いてその要請とやらが読みあげられた。その内容はおよそ次の通りである。

- 1) 本日、一部の学校で起こった事態に関し、政府は事態の収拾に努力中である。
- 2) 現在の状態がこれ以上悪化しないよう、国民は政府に協力してほしい。
- 3) デモを行なっている人々の中には、事態の悪化を画策する悪質な連中も含まれているようだ。
- 4) 政府は、客としてこの国に来て住んでいる外国人の生命財産を、国民同様保護する義務がある。特に、各国外交官の安全を守ることは政府のつとめである。
- 5) 国民は、対外友好関係を傷つけるような行為、および民族相互の対立憎悪をもたらすような行動を慎まなければならない。
- 6) 少数派に対する多数派の暴力、血気にはやってしたい放題のことをするならば、政府は、国民であれ外国人であれ、責任上それを取締まる。

7) 政府は、国民の間に混乱が起きないように、デモを整然と撤回することを要請する。

ことの起こりは、毛沢東のバッジを着用している中国人学生達に対して、教師がビルマ文部省の通達（ビルマでは、校章、優等生章、児童章、少年赤十字章等特定の数種類のバッジを除いて、他のいかなるバッジも着用して

はならないことになっている）をたてにその撤去を求めたのだが、学生達が拒否したため発生した。

既に6月22日には、毛沢東のバッジを着けた学生達がバッジの着用許可を要求して騒いだため、小学校と中学校が各1校ずつ、無期限閉鎖されている。政府からわたくしの所に派遣されてきている自動車の運転手が、23日朝わたくしの所に来て「毛沢東のバッジの件で、学生達が騒いでいる」と報告した。その話を何気なく聞き流したわたくしは、翌24日、運転手の案内でラングーンの西部地区見物にでかけた。チーミンダインからカマユッに至る途中の道で、三々五々連れだつて歩いている中、高校生のグループが、わたくしの横に坐っている妻に向かって何ごとか叫んだのを聞いたわたくしは、若い連中が外国婦人を見てひやかしたのであらうと、その時は気にも止めなかったのだが、今になってようやく納得がいった。かれ等は閉鎖された学校の中国系学生達だったのである。それにチーミンダイン地区は、事件の発端となったラター、ランマドー、バハンと並んで、中国系学生の活動が最も盛んな地区の一つでもあり、わたくしの運転手の家は何とそのチーミンダインにあったのである。

27日火曜日、7時半の授業に間に合うよう毎朝6時半にはわたくしの家に迎えに来ていた運転手が、その日に限っていつまで待っても姿を現わさない。たまりかねたわたくしは、徒歩で学校に行こうと歩き出し、家から200メートルほど行った所で運転手にバッタリ出会った。開口一番、かれは、「毛沢東のバッジをつけた学生達が一晚中騒いだため一睡もできなかった」とこぼした。言われて気がついたのだが、なるほどかれの目は充血して真赤だった。「紅衛兵のビルマ版だ。本家の文化革命が一段落したので、そろそろ周辺の国々にその影響が表われだしたのだな」と、その



写真3 国立ラングーン外国語学院の新築校舎。現在、フランス語、ドイツ語、日本語、中国語、ロシア語の5科が開設されている。

時になっても事態を軽くみていたわたくしは、学校に着いて驚いた。ラングーン外国語学院の学生達は、普段はめったに欠席などしないまじめな学生が多いのだが、どうした訳か、その日は教室がガラ空きである。いつもなら、にこやかな笑顔で教室を彩っている女子学生達は、1人も見えない。出席している男子学生達も、バスがないので学校に出て来るのが一苦勞でした、と口々に言った。毛沢東のバッジの件で、ラングーンの下町では大がかりなデモが起きているとも言った。帰宅後読んだ新聞によれば、この日の朝からさらに中、高校9校が閉鎖されたと報道されていた。そして、夕方7時20分のこの放送である。遂に来るべきものが来たなと、わたくしは思った。

情報省からの国民に対する要請文が放送された後、間髪を入れずラングーン地区治安検事ウー・バマウンの署名入り布告が二つ読みあげられた。一つは、夜間外出禁止令で、他の一つは、集会、デモ禁止令である。夜間外出禁止令は、「1967年6月27日午後7時から何らかの新しい指令がでるまでの間、何人といえども当局の許可なくしては、ラングーン地区内における午後7時から午前5時までの外出を禁止する」という内容のものであり、公安条例第6条に基づいて発動されている。

集会、デモ禁止令は、公安施行規則第144条の発動によるもので、「1967年6月27日夜7時から7日間にわたり、ラングーン地区内において、(1)集会(30日付ビルマ字新聞「労働者人民日報」によれば、4人以上の集会を禁止するとある)、(2)演説、アジテーション、扇動、(3)集団暴力行為を禁止するというものであった。翌28日のビルマ紙「労働者人民日報」や英字紙 The Guardian の記事およびあちこちからわたくしの所に伝わってきた各種の情報によれば、前記二つの禁止令は26、27の両日ラングーン市内でビルマ人による大規模な対中国人報復デモが行なわれ、かなりの人的、物質的被害が生じたばかりか、引続き中国人とビルマ人間の対立紛争が激化し相当の犠牲がでるおそれがあるため、事態を即刻収拾する必要上発令されたものであることが判明した。

この頃からいろいろな噂が乱れとびはじめた。ことに、ビルマ人市民を激昂させたのは、ある高校でまだ若いビルマ人女子教員が多数の中国系学生に取り囲まれて裸にされ、陵辱されたあげく半死半生の姿で病院に担ぎ込まれたが遂に死亡した(一説によれば、病院に着いた時には既に事切れていたともいう)という噂である。また、次のような噂も伝わった。すなわち、北京のビルマ大使館が中国人暴徒によって襲撃され、在中共ビルマ大使は外国公館内に逃げ込んでかろうじて助かった(あるいは、別の噂によれば、ビルマ大使は暴徒によって殺された)というのである。もっともこれらの噂は、29日には完全なデマだとして公式に否定されたけれども、女子教員の件だけは今日に至るもいまだに真偽不明である。このような訳で、27日発生したビルマ人のデモは、対中国人報復デモであり、完全な緬華対立の形をとっていた。

27日の昼間の紛争で負傷した人の数は、病院にかつぎ込まれた人だけでも100人を越え

ている（28日付ビルマ紙「労働者人民日報」による。以下、カッコ内の日付はいずれも同紙の報道によるものであることを示す）。同時に、多数の死者がでたことも事実だが、新聞やラジオのニュースはすべて報道管制下にあるらしく、正確な人数は発表されていない。一説によれば、犠牲者の数は、中国人、ビルマ人合わせて40人ともいい、また別の説によれば、100人ともいう。ある確かな筋からの情報によれば、死者の数は判明した限り中国人だけで60人にのぼるが、実数はそれをはるかに上回るとのことである。7月1日から死者の身元確認が許されたので犠牲者は次々と身内の者に引取られて行ったが（7月3, 4, 5, 8, 9, 11日付）、中でも17, 8才から20才くらいの中国系女子学生が圧倒的に多いことがわたくしの注意をひいた。犠牲者の大半は撲殺されたらしいが、中にはダー（ビルマ製の刀）で斬殺された者もいるといわれる。

27日には、ラングーン市内ハルピン道路にある中共大使館に学生を中心とする多数の群集が押しかけ反中共デモを行なった。同時に、ラングーンの下町では中国人経営の映画館や飲食店、寺廟等が襲われ、暴徒達は家の内部から次々と物を持ち出しては火をつけはじめた。

27日午前の授業を、それでもまがりなりに終えたわたくしは、同僚の日本語教師を海岸通りにあるストランド・ホテルまで送り届けようと、午後2時頃車を走らせてみてやっと事態の深刻さに気づいた。ラングーン銀座と称してもよい市内随一の繁華街スーレー・パヤー通りには武装した兵士達が出動していて南北の交通が遮断されているため、右折できないわたくしの車は、やむを得ずアウンサン將軍通りをまっすぐ東に向かった。スーレーパゴダ通りとアウンサン將軍通りの交差点周辺は興奮した群集でいっぱいであり、交差点近くの映画館の前では何か大きな物が燃やさ

れていた。文部省、国民計画省等の中央官庁が入っている合同庁舎の西側道路を右折してホテルに接近しようとしたわたくしは、まともや路上で物を燃やしている群集に気がつきあわてて車を引返させた。来た道に戻るのにははや危険だと感じて、動物園のあるラングーンの東北方面に車を走らせ、シュエダゴン・パゴダの南入口の前を通って危険個所を大きく迂回、やっとのことで自宅まで戻った。

6月28日には、ラングーン市内の大学、予科大学、工業学校、国立高校、中学、小学のすべてが閉鎖された。わたくしの勤務先、国立ラングーン外国語学院からも、学校が閉鎖されたから登校しないよう、あなたの場合中国人と見まちがわれるおそれがあるから外出は絶対避けるようにという連絡が来た。

同じ28日夜、さらに次のような連絡が、ラングーン在住日本人会からわたくしの所に入った。29日午前零時から戒厳令が発令されるというのである。翌朝、ラジオのスイッチを入れたわたくしは、緊張したアナウンサーの声で、それが事実であることを知った。

ラジオの伝えるところによれば、「革命評議会議長ネーウィン將軍が戒厳令を発令した。戒厳令は1967年6月28日午後12時から発効する。その間、参謀次長サンユ準将（陸軍）によって指名された区域が戒厳令下に入る。戒厳令下の区域については、参謀次長から権限を附託された人物が全権を行使する」というのである。

引続き、サンユ準将の名前で、戒厳令の適用区域4カ所が指定された。いずれも、華僑の密集居住地帯である。続いて、戒厳令適用4区域の全権限がラングーン管区司令官フラボン大佐に附託された旨、発表された。

6月28日、遂に中共大使館内に侵入したビルマ人によって、経済使節団員の中国人が刺殺されるという事件が発生した。犯人2人の内、1人は現場で取り押えられ、残りの1人

は逃走した(29日付)。

ラングーン市内の緬華紛争は、集会・デモ禁止令、夜間外出禁止令、戒厳令と矢つぎ早にとられたビルマ政府の措置と一連の華僑保護対策〔例えば、生命の危険にさらされたラングーン市内の華僑老若男女計1328人(7月2日付)と6月27日に閉鎖された国立第二・第三高校(共に元華僑系の高校)の男女学生530人(7月3日付)とが、軍によってミングラードン兵営に保護収容されている〕とによって、次第に平静さをとり戻してきたが、中共・ビルマ両国間の外交関係は、遂に悪化の傾向を見せはじめた。

北京放送は、対ビルマ非難の放送を伝えだしたし、同時に、非合法化され現政府に敵対しているビルマ共産党(白旗共産党)のネーウィン政権を非難する声明も、北京放送を通じて伝えられるようになった。

このことをきっかけに、それまで在ビルマ華僑に向けられていたビルマ人民衆の憎悪と憤まんが中共政府に向けられるようになり、各地で毛沢東および白旗共産党委員長タキン・タントゥンの両名に対する反毛・反タントゥンのデモが起こりはじめた。

当初、米の絶対的不足を背景とするビルマ経済の危機と緬華紛争の両要素は、ネーウィン将軍を首班とする現ビルマ政権にとって、最大の危機であったことは疑いの余地がない。仮に、血走った民衆の眼が現政府に向けられたらどうなっていたか。今回の緬華紛争は、東西両陣営のいずれにも属さず、一部からはその政策が時代錯誤だ、鎖国政策だとまで非難されるほど、かたくななまでに独自の道を歩んできたビルマにとって、確かに、その対中共外交上好ましからざる事態をまねきはしたけれども、その後の中共政府のビルマ非難は、皮肉にも現ビルマ政権の命を救ったという逆説も成立し得るであろう。

とにかく、ビルマ民衆の眼は、今や完全に

中共に向けられた。大規模な反中共デモが各地で頻発、(毛沢東やタントゥンをかたどったわら人形が燃やされたり水浸けにされたりした。7月15日付「労働者人民日報」によれば、6月30日から7月14日までの間に、278町村で、のべ100万人にのぼる群集がデモに参加したと報道されている)、それに伴い公安条例第144条(集会・デモ禁止)が、ラングーン以外の地でも適用されるようになった。144条は、6月30日にはマンダレー、7月3日にはモールメン、5日にはシュエボー、7日にはチャウメーで、それぞれ発動されている。

ラングーンでは、7月4日午前7時に期限切れとなる第144条の適用がさらに1週間延長される旨、ラジオで放送された。11日には、夜間外出禁止令が1時間短縮されて午後8時からとなったが、144条の適用はさらに2週間延長された(12日付)。

この間、ラングーン市内では徐々に平穏さをとり戻し、戒厳令適用区域の出入りも次第にゆるめられてきた。当初、嚴重な身元調査を行なった結果重要な用件をもつと認められる者に限って発行されていた通行証も広く行きわたってきたし、一部のゲートでは身分証明書さえ携行していれば、自動車の出入りも非公式にはあるが黙認されるようになった。

こうして、7月20日午後7時には公安条例第144条が、そして同日8時には夜間外出禁止令がそれぞれ撤回され(21日付)、24日には閉鎖されていた各学校が、一部を除いて再開されることになった。だが、戒厳令のみは依然として効力を保っており、戒厳令適用区域内では144条も夜間外出禁止令も、まだ解除されてはいない。

(1967年7月21日記。筆者は現在、コロンボ計画に基づく専門家としてOTCAから派遣され、The Institute of Foreign Languages, RangoonのProfessor in Japaneseとしてビルマに滞在中)

東南アジアにたいする 教育援助協力について

—視察旅行報告—

本 岡 武

I

わたくしは、7月22日から28日までのちょうど1週間、福田繁文部事務次官とシンガポール、クアラルンプール、バンコクをひとまわりしてきた。

1年4カ月ぶりで東南アジアを訪れたわけだが、これら首府がいずれもどんどん発展していることが印象的だった。まさに発展途上国であるとの感が深い。しかし、これら3国とも東南アジアのなかで政治的経済的に最も安定しているだけに、政治・経済における基本的な流れはほとんど変わっていない。とくに、政府人事が動かず、旧知の高官がそのままのポストにいたので、よけいに安定性が感ぜられた。もちろんベトナム戦争の影響もあって、いろいろ問題をかかえているが、現在これら3国を特徴づけているのは「安定と発展」だといえよう。

京大東南アジア研究計画として本年度は第1期5カ年計画の第5年度にあり、すでに現地調査はほぼ終了しているので、現地に滞在する研究者は最も少ない時期にあたっている。それでもなおかつ京大東南アジア研究センターの関係者として、マラヤ大学の「日本研究講座」を担当している客員教授森口兼二（教

育学部助教授）、客員講師栗本一男（教育部助手）と前田成文。バンコクでは東南アジア研究センターのバンコク連絡事務所をあずかっている福井捷朗（東南アジア研究センター助手）、タマサート大学の「日本研究講座」客員講師桂満希郎、また東北タイ・ブリラム県の医療協力に赴いている矢崎次郎（結核研究所助手）、さらにインドのアグラにあるらいセンターから帰国の途次バンコクによられた西占貢（医学部教授）の諸氏にお目にかかった。これらの方々がきびしい条件のもとでひじょうに頑張って、仕事を進められているのには、頭のさがる思いがした。同時に、京大東南アジア研究の現地関係者が全体としてチーム・ワークがとれ、よくまとまっていること、さらにマレーシアでも、タイでも、現地政府や大学機関と密接な連絡がとれていることを見てほんとうに嬉しかった。自画自賛のきらいがあるが、わたくしは、京大東南アジア研究計画がほぼ理想的な状態ではこばれてきたと思う。いよいよ来年4月から第2期計画に入るわけであるが、少なくともタイとマレーシアにかんしては、仕事が順調に進められうる条件が整っていると確信した。

II

このたびの旅はもともと福田次官の随行だったので、東南アジアの教育・文化援助についての実情を視察することが主目的であった。幸い、マレーシアでは Mohdi Khir Johari、タイでは M. L. Pin Malakal 文相と Bunchana 国家開発省副大臣（海外援助担当）を訪問、その他、主要な関係者に面会することができた。わたくし自身、教育問題の専門家ではないが、東南アジア経済開発とそれにたいするわが国の援助という観点から教育援助にひじょうに興味をもっている。（たとえば座談会「日本の海外技術協力と教育」文部時報、昭和40年7月、拙稿「低開発国におけ



マラヤ大学にて 右より森口兼二京大助教授、
Aziz マラヤ大学経済学部長、筆者

る教育援助の役割」文部時報，昭和42年6月を参照されたい。）

わたくしはもともと，東南アジアにたいするわが国の援助はごく大まかに分けて，商工業は少なくとも有償ベース，できれば民間ベースで行なうべきであり，政府ベースの無償援助は農業・医療・教育の3本にかぎるべきだと考えている。いいかえると，この無償技術援助はこの3部門に集中すべきだと思う。しかし，教育部門にかんしては，他の2部門にくらべ，その重要性にもかかわらず，あまり進展を見ていない。ところが，農業開発を例にとっても，その決定的要因は開発を担う農民自身の知的な水準や自覚と自発の程度にある。明治以来の日本近代化においてはたした教育の役割，あるいは最近とくにアメリカにおいてやかましく言われるようになった教育の投資効果から見ても，東南アジアにおける教育援助のおくれはまことに残念だと言わざるをえない。

タイ・マレーシアは東南アジアとしては，社会経済的發展から見て模範的である。それだけに東南アジアとしては文盲率は最も低く，学校教育も初等から大学まで最も完備しているといえよう。しかし，近代的教育の水準からみると，あらゆる面でひじょうにおくれている。両国とも義務教育制をとり，就学率は

80%をこえているものの，たとえば，マラヤの小学校では二部授業どころか，夕方に始まる三部授業さえも行なっている。教員は量・質ともにおくれ，教科書をはじめ，教材には不足している。また，義務教育課程においての離脱率が高い。したがって，初等中等の教育水準を1日も早く高め，その内容を充実することは，これら両国にとって焦眉の課題といわなければならない。

わが国がこれまで教育協力援助として進めてきているのは，次のとおりである。

1. 文部省関係として，(1) 留学生の受け入れ，(2) 中等学校理科教員の派遣および理科器材の援助，(3) 教育関係者の日本視察招待。
2. 外務省関係として，(1) 東南アジア5大学における「日本研究講座」，(2) 日本の教育関係映画の贈与。
3. ユネスコ関係として教育指導者の受け入れ研修。
4. 海外技術協力事業団関係では日本語教師の派遣。

はたして，これらの教育援助がどれだけの成果をあげてきているのかは，たしかに大きな問題である。最近，海外技術協力について，その evaluation がやかましくいわれてきたが，そのうちの教育援助についてもその evaluation がきわめて重要である。

これら教育援助のうちで最大の事業である留学生受け入れについても，わが国政府が費用を負担する「国費留学生」と，留学生の個人負担による「私費留学生」とに分かれる。ところが私費留学生にかんして，日本での留学の成果があがらないという現地の批難の声を，このたびの旅行でもしきりに聞かされた。国費留学生についてはせっかくの日本側の努力にもかかわらず，かれらが帰国後，現地諸国であまり重要視されず，留学の成果をあげるだけのポストにつきにくい実状にあるようだ。少なくとも国費留学生については，かれ

らが本国に帰ったあとでの実態を追跡調査によって正確に把握することの必要が痛感された。わたくしは留学生問題はその選考からはじまって、帰国後のアフターケアに至るまで、できるだけ措置がはかられるべきであり、そのためには正確なデータにもとづく留学生計画の再検討が必要ではないかと思う。

教育援助として現在実施されているもうひとつの大きなプロジェクトは昭和40年度から開設されたタマサート大学（タイ）、41年度に開かれた中文大学（香港）、アテネオ・ド・マニラ（フィリピン）、マラヤ大学（マレーシア）およびインドネシア大学（インドネシア）の5大学への日本研究講座である。教授1と講師2からなるチームがそれぞれの大学に派遣されている。この講座はまだスタートをきったばかりであり、多くの問題をかかえているのは当然であろう。しかし、この講座の目的や理念、その運営方法についても明確な統一的な考え方が確立できていないのではないかと思われる。わたくしはこの講座がその実施のいかんによっては、ひじょうに高い成果をあげうるものと大いに期待している。また、具体的には留学生の選考にさいしても、この講座と密接な関係を保たなければならないと考える。

もともと教育はその成果をあげるためには時間の経過を必要とするとともに、教育者という人的要素に待つところがきわめて大きい。この教育のもつ本質は教育協力において、いっそう強くあらわれる。したがって、従来のわが国の教育協力の成果はいまはまだ批判しうる段階に至っていないが、人的要素の重要性がこのたびの旅行でも痛感された。

さて、タイ・マレーシア両国がわが国にいかなる教育協力を求めているかは、少なくとも両国文相との面会のさいの話題にでたかぎりでは、次のようである。

1. マレーシアとしては、(1)初等教育のい

っそうの拡充、とくにT Vを利用した視聴覚教育のための指導者養成、(2)理科教育振興のための理科教員の日本での研修、(3)将来、日本との関係をさらに深めるため中学から日本語を第二外国語として採用したいため、わが国のこの面での積極的な指導と参与。

2. タイとしては、(1)教員志望生の留学受け入れ、(2)とくに音楽・図工関係の教員不足がいちじるしいので、この面での指導者の派遣、(3)中堅級農業をはじめ職業リーダーの養成のための農業指導者、職業指導者の派遣。

この新しい申し出でにたいしていかに対応するかは、これからのわが国としての大きな教育協力の課題だといわなければならない。これに対する日本の姿勢が十分に考えられなければならない。しかし、具体的には、まず日本から教育関係の専門家を派遣することになる。もちろん、教育関係の資材（これには教科書印刷から農業教育用のトラクター、あるいはT V用のビデオテープ装置までも含む）の提供はたしかに必要であり、効果的である。これらはたとえむずかしくても予算面で解決することができる。ところが、これら教材供与のさいも、専門家がこれにつきそわないかぎりには、相手側の要望に即しないものを送ったり、あるいは、たとえ要望に即しても実際にはなんら利用されないままに終わるおそれが多分にある。したがって、専門家派遣がいかなる場合にも必要である。これら専門家として要求される条件は教育者として適格者であることはもちろんだが、これに加えて現地側の機関にとけこみうる人であることが大切だ。これら専門家は学校なり研究機関なりの配属される機関だけでなく、積極的に教育行政の中枢部と接触することが必要である。行政中枢部に積極的に働きかけることが長期的な効果をあげるためにはきわめて大切なのである。

そのためには、派遣専門家にさらにつぎの

条件が要求される。第1は、現在東南アジアでの国際語となっている英語の能力を備えることはもちろん、さらにすすんではタイ語なりマラヤ語なりの現地語を習得することである。わが国の海外技術協力にさいして、一般にこの語学について、ともすれば軽視されてきたのではないかと思われる。第2は在外勤務期間の問題である。たとえば理科教育のため数カ月派遣するというだけでは、誰が考えてもあまりにも短かすぎる。わたくしは少なくとも2～3カ年は必要だと考える。しかし同時に東南アジア諸国へ行ったきりになるような技術専門家は、日本の事情にうとくなり、マンネリズムにおちいってしまうことが多い。その意味で専門家のローテーションをはかるべきである。具体的にはそれだけの政府定員が必要ではなかろうか。昭和42年度予算から農林省農林水産技術会議の熱帯農業研究業務室は約20名の熱帯における農業技術者の定員をもった。しかもこの定員にあてられる農業技術者は帰国後国内の農業試験場に働く。農業技術専門家が国内と国外とでローテートされる制度である。これは日本の実情としては考えられる最善の方策であろう。わたくしはこうした定員が教育協力にもあてられるべきではないかと思う。

さらに、東南アジア教育協力のためには東南アジア諸国の教育の実態が十分に把握されなければならない。いいかえると現地国側からの援助要請をそのままのみにするのではなく、むしろ進んでこちらから「要請を要請する」という態度をとるべきである。わたくしはとくに教育部門については、わが国の実態研究の不足なことを痛感する。ユネスコ報告にあるような形式的・統計的な実態は比較的によく調査されているが、その質的な研究

があまり進んでいない。また、学校教育だけでなく、広い意味での社会教育あるいは家庭教育についての実態もあまり把握されていないといつてよい。文化人類学的研究に結びつくこの研究の重要性を強く指摘しておきたい。

最後に、特殊な問題として在外邦人子弟の教育がわが国の東南アジア経済開発の協力援助のために必要不可欠になっている事実をとりあげねばならない。というのは、子弟教育を軽視しては、とうてい日本人はおちついて現地で仕事ができないからだ。バンコクに現在50余りの企業が進出し、タイ経済発展に大きく貢献している。この企業進出のひとつの要因として、バンコクの日本人小学校がしっかりしているから、日本から技術者を送りやすいということを知られた。まことにもっともなことだ。日本では学校があるのは当然であり、ちょうど空気のように、そのありがたさがわからない。ところが学校のないところでは、空気がないのと同じようなものである。日本の発展途上国にたいする援助協力の具体的なありかたを考えてゆくとき、在外邦人子弟教育の問題はひじょうに深刻である。

III

短期間ながら、きわめて有意義な旅行であった。これについては在タイ大使館、とくに大使関守三郎、公使和田力、一等書記官大高時雄、三等書記官安藤茂美、在マレーシア大使館、とくに大使甲斐文比古、参事官浅羽満夫、三等書記官吉川勝巳、在シンガポール大使館大使上田常光、二等書記官長谷川和年、さらに京大関係者、とくに在バンコクの福井捷朗助手、在クアラルンプールの森口兼二助教授をはじめとする皆様方にたいへんお世話になった。心からなる謝意をあらわしたい。

(1967年8月1日)